

『家族、バズる』

【梗概】

荻上ヒロシ・美沙・愛の三人は何の変哲もないよくいる日本の核家族。そんな荻上家が本人たちの与り知らぬところで突如としてバズってしまった、その家は「聖地」として外国人観光客たちが大挙して訪れるようになる。突然のことに混乱する一家だったが会社をクビになった一家の父親・ヒロシはビジネスチャンスと発想を切り替え家を見世物に観光ビジネスを始める。初めは渋るものの母親の美沙も娘・愛の将来のために同調し、その一方で愛は両親の変貌ぶり反発し家出してしまう。そんな折、観光客で賑わう荻上家に一般人日常生活の消費は人権侵害だと訴える活動家グループが現れ、人間の鎖で道路を封鎖、観光客や近隣住民、警察も交えて大騒ぎになってしまう。騒ぎに嫌気の差した愛は一度は家に戻ってきたものの、スーパーの店長である美沙が観光ガイドとして雇った従業員のベトナム人技能実習生・グエンと共にその場を

去り、観光客を喜ばせるために鎧姿になったヒロシは床に倒れて動けなくなり、自分の過ちに気付いた美沙は活動家と共に抗議活動に参加し、一家は瓦解する。

それからしばらくしてコロナ禍到来。荻上家を訪れる観光客はもはやいなくなり、ただ一人その家に残ったヒロシはコンビニバイトで糊口を凌いでいる。美沙は別居して愛と共にマンションに住み、仕事は依然と同じようにスーパーの店長を続けているため表面上不満は見えないが、愛とは距離ができて心中では寂しさを感じている。愛は不良とまではいかないが親友のエリとグエンと共に遊び歩き、酒宴に興じたりもしている。

そんなある日、愛は偶然コンビニでバイト中のヒロシと遭遇する。二人は少しだけ打ち解け、元通りにはならないかもしれないけれども、家族の再生を予感させるのであった。

【登場人物表】

萩上ヒロシ	(男・46)	萩上家の父親
萩上美沙	(女・42)	萩上家の母親
萩上愛	(女・16)	萩上家の娘
グエン	(男・23)	ベトナム人技能 実習生
エリ	(女・16)	愛の親友
島津	(男・68)	萩上家の向かい の住民
秋本	(27)	ヒロシの後輩
森	(53)	ヒロシの上司

○荻上家・外観（朝）

『ドラえもん』の野比家のような平凡な日本の二階建て戸建て住宅。

○荻上家・愛の部屋（朝）

寝相悪くベッドに寝ている荻上愛（16）。

部屋に母親の荻上美沙（42）が入ってきて、布団をのける。

美沙「ほーら、起きてってば」

愛、往生際悪く丸まって、

愛「うーん……勝手に部屋入らないでってばあ」

美沙「じゃあ自分で起きて」

美沙、部屋を出て行く。愛はなおも丸まったまま、スマホをチェックする。

○同・居間（朝）

ワイシャツ・ネクタイ姿の荻上ヒロシ（46）が新聞を見ながら朝食を食べて

いる。

二階から降りてきた美沙が部屋に入ってきて忙しなく台所に向かう。

ヒロシ、空の茶碗を美沙に向けて、

ヒロシ「あ、おかわりちょうだい」

美沙「はあ？ 自分でよそいなよ」

ヒロシ、へらへら笑って、

ヒロシ「冗談だよ」

炊飯器にご飯をよそいに行くヒロシ。

美沙、呆れたようにヒロシを見て、

美沙「何が面白いの」

ヒロシ「よくあるじゃん、こういうの。ドラ

マとかで」

美沙「いつのドラマそれ。歳バレるよ」

ヒロシ「いいじゃんバレたって。隠す相手な

んかどうせいないんだから」

美沙「あ、豆乳あったっけ」

冷蔵庫を開ける美沙。

ドタドタと音を立てて愛が階段を駆け下り、居間に入ってくる。

ヒロシ「おはよう」

愛、テーブルの上からトーストを一枚取って口にくわえ、髪を手ですきながら玄関へ。

美沙「お弁当」

美沙、呆れた顔で弁当を持っていく。

美沙「あんたさあ、もうちよっとおしとやかにできないの？」

愛「(トーストくわえて)ほういうのひたいほふれ！」

美沙「何言ってるかわかんない」

愛「そういうの時代遅れ！」

美沙「そういう問題かなあ」

愛「行ってきます！」

玄関の外へ駆け出す愛。

二人のやりとりにヘラヘラ笑いながら、のんびり朝食を続けるヒロシ。

美沙「ねえ、じゃ行ってくるから、残ったやつちゃんとラップかけて冷蔵庫入れて

——」

ヒロシ「わかってる、わかってるって」

美沙「わかってるならいいけど」

美沙、玄関から出て行く。

ヒロシ、新聞を下ろしてテレビを見る。

○同・外（朝）

スーツ姿のヒロシが玄関から出てくると、旅行案内を片手に持ち、バックパツクを背負った太ったドイツ人の男が家を眺めているのに目を留める。

ヒロシ「こんにちは。どうかしました？」

ドイツ人、にこやかにドイツ語で何かを話し出す。

ヒロシ「え、あ、ごめんなさい。ちよつとわかんない。ハブアナイスデイ」

ドイツ人「ハブアナイスデイ」

ヒロシ、ぎこちない笑みを浮かべてその場を去る。

○スーパーマーケット・バックヤード

従業員たちが朝礼に集まっている。

美沙は店長としてそこに立っている。

美沙「連絡事項はそれぐらいですかね。」

それじゃあ、今日はグエンさん、お願いします」

グエン(23)は技能実習生。

グエン「いらっしやいませ」

全員「いらっしやいませ」

グエン「ありがとうございます」

全員「ありがとうございました」

○オフィス

ヒロシが自分のデスクで印刷された

クレーム事例集を読んでいる。

そこには「他店で買ったものだが同業者なら返品に応じるべきだ」というお客の言い分が載っている。

ヒロシ「(軽く笑って)うわ、すっごいな」

両手一杯にダンボールを抱えた後輩の秋本(27)が自分のデスクに戻って

くる。

秋本「よいしょお」

秋本、ダンボールをデスク脇に置くと、中から新品のスマホケースを取り出す。ダンボールの中には同じスマホケースが大量に入っている。

ヒロシがやってきて、

ヒロシ「それ、こないだ言った対応機種の記事間違ってるとやっ？」

秋本「あ、はい、そうです」

秋本、スマホケースの箱から説明書を取り出して、対応機種欄に訂正シールを貼る。

ヒロシ「うわー、大変だ。工場で行ってくれよなあ。そっちのミスなんだもんねえ」

秋本「そっすね」

ヒロシ「手伝おうか？」

秋本「あ、いや、大丈夫です。荻上さん、クレーム対応で忙しいでしょうし」

ヒロシ「いやいや、ずっと事例見てるだけだ

からさ」

秋本「大丈夫です。大丈夫です」

部長の森（53）が二人を見ずに言う。

森「それは秋本くんがやるから、荻上さんは

自分の仕事をして」

ヒロシ「あ、はい」

○高校・屋上

愛と同級生のエリが座って菓子パンを
食べている。

エリ「こないださ」

愛「うん」

エリ「やべえめっちゃえでけえ犬いた」

愛「こわ」

エリ「ガチ可愛かったし」

愛「ふうん」

愛、ビニール袋からポテトチップスの
袋を取り出して、封を切らずに袋に
空手チョップをする。

愛「とう！」

袋は破裂して、その音で近くに居た他の生徒たちが少しの間振り返る。

エリ「それやめない？」

○荻上家・外（夜）

ヒロシが帰ってきて、玄関前で立ち止まると、腕時計を見る。22時前。

ヒロシ、玄関の鍵を開けて家に入る。

ヒロシ「ただいまあ」

○同・寝室（夜）

布団に入って時代小説を読んでいる

ヒロシと、テレビを見ている美沙。

美沙「ねえ今日さあ」

ヒロシ「うん？」

美沙「家出るとき変な外人いなかった？」

ヒロシ「ああ、なんか観光客みたいな人？」

美沙「その仲間かなあ。帰ってきたらその路上でガヤガヤ騒いでた」

ヒロシ「仲間って」

美沙「なに？」

ヒロシ「いや別になんでもないけどさ」

美沙「なにって」

へらへら笑うヒロシ。

○同・愛の部屋（朝）

外のスズメの鳴き声で目を覚ます愛。

しばらくぼーっとして、それからスマホを見る。

○同・居間（朝）

制服に着替えながら愛が階段を駆け下りて部屋に入ってくる。

愛「ちよっとお母さん起こしてよ！」

と、ヒロシと美沙がなにか不安げな表情で話し込んでいることに気付く。

ヒロシ「大丈夫だよ」

美沙「でも家空けられる？」

愛「え、なに、どうしたの？」

美沙、カーテンの閉められた窓をアゴ

で差して、

美沙「外」

窓に近寄ってカーテンの隙間から外を見る愛。

すると、外にはツアー客の一団と見られる10人ほどの外国人が、家の前の路上で楽しげに話したり、家を眺めたり、スマホで写真を撮ったりしている。愛、その一人と目が合って、咄嗟にカーテンの隙間を閉じる。

愛「え、なんかあったの？」

答えられず、ただ愛の顔を見つめるだけのヒロシと美沙。

○同・玄関の外（朝）

抵抗するヒロシを愛と美沙が強引に押していく。

ヒロシ「海外の取引先とは訳が違うんだから。

愛ほら、愛お前英語勉強してるじゃない」

敷地の外に押し出されて、外国人観光

客たちの前に立つヒロシ。

観光客たち、一斉にヒロシを見る。

ヒロシ「あ、どうも、こんにちは。ハロー、

あー、エブリワン」

鈍く頷いたり小声で返事をしたりする

観光客たち。

ヒロシ「あの、えーっとですね、ドウユー

ミーン？ ワットザ……な、なんでこち

らに集まってるんですか？ 道に迷って

ます？ ア・ローング・ストリート？」

だめだこりやという表情の美沙。

と、一人の観光客が前に出て、

観光客1「アー、オーケー、オーケー」

観光客1、両手を合わせて、

観光客1「アリガトウ。ハブアナイスデイ」

他の観光客たち「ハブアナイスデイ」

ヒロシ「は、ハブアナイスデイ」

ヘラヘラ笑うヒロシ。

帰って行く観光客たち。

ヒロシ、得意げに美沙と愛を見る。

○住宅街（夜）

仕事帰りの美沙が歩いてくる。

と、道の向こうから外国人観光客の
一団と見られる人々が楽しげにこちら
に向かってきて、美沙とすれ違う。

美沙、足を止めて、一団を眺める。

観光客たちは美沙を見て、

観光客たち「ハブアナイステイ」

美沙、警戒しながら少し早足で家に向
かうと、家の前に外国人観光客たちが
群がっていて、家をバックに記念撮影
をしたりしているのが目に入る。

○警察署・刑事課（夜）

警官と荻上一家が話している。

警官1「何か盗まれたとか、壊されたとか、
敷地に無理矢理入ってきたとか……」

○同・生活安全課（夜）

別の警官と荻上一家が話している。

警官2 「確認させていただきたいんですが、具体的な被害はないんですよね？」

○同・交通課（夜）

また別の警官と荻上一家が話している。

警官3 「刑事課でも生活安全課でも対応できないケースだと、私ども交通課でも対応は難しいかなあ」

美沙「でも、現に困ってるんですよ。これじゃあ日常生活に支障が出るじゃないですか」

警官3 「いやたとえば、なにかテントとか露店とかね、そういうので道路を占有しているとなるとまた話は別なんだけれども」

言い返せず、不満そうな一家三人。

○荻上家・外（夜）

家の前にパトカーが停まっている。

警官4と警官5が観光客たちに何か

話しているのを荻上一家は眺めている。
観光客たちが帰って行くと、警官4は
荻上一家のところにやってくる。

警官4「とりあえず迷惑だつてことは伝えま
したので、またなんかあったら、ね、連絡
してください」

美沙「はあ」

観光客の一人と英語で楽しげに話して
いる警官5を見る愛。

○荻上家・居間（朝）

朝食を取っている美沙とヒロシ。

外から観光客たちの騒音が聞こえる。

愛が居間に入ってきてテーブルにつく。

ヒロシ「お、今日早いじゃない」

愛「うるさくて寝てらんないから」

ヒロシ「良かったじゃん、目覚まし代わり。

へへへ」

美沙「よく笑えるね」

ヒロシ「そう怒らないだつていいじゃない」

愛、食べている途中で席を立ち、

愛「あーもう落ち着かない！ 行ってきます！」

美沙「お弁当」

愛、弁当をバッグに入れ、トーストを口にくわえて玄関へ。

○同・外（朝）

愛、玄関から出てくると、観光客たちの好奇の眼差しを浴びる。

観光客の一人が大袈裟に驚いた顔で、観光客の一人「アニメ！」

外国語で話し出す観光客たち。言葉の端々に「アニメ」の語が聞こえる。

愛、怪訝な表情を浮かべる。

○通学路（朝）

愛が学校に向かってしていると、つかつかとエリが歩み寄ってきて、黙ったままスマホを見せる。

そこには haveaniceday のハッシュタグの付けられた、外国人観光客の撮影した荻上家の写真のインスタグラム投稿が映っている。

エリ「ユーの家じゃん。どゆこと？」

愛「わからんとしたか答えようがないが、更にわからなくなった」

○オフィス

クレーン事例集を読んでいるヒロシ。
そこに森がやってきて、

森「荻上さん、ちょっと会議室いい？」

ヒロシ「あ、はい」

○高校・屋上

パンやお菓子を食べながら愛とエリが
スマホを見て話している。

エリ「あれから授業中に色々調べてみたんだ
けどな」

愛「うん。いや授業中にやんな」

エリ「ほら、これ。あんたさんの家、どうも世界的にバズってるみたいだぜ」

愛「だからそれがなんでなんだよう。バズ要素ある？」

エリ「まさしくその点なのだ」

愛「は？」

エリ「今、世界は激動の時代。とくに欧米では様々な変化が日常を襲い、人々はライフスタイルの急激な変更を余儀なくされている……ところがおめえさんの家ときたらどうなんや！」

愛「ど、どないや？」

エリ「めっちゃ普通」

愛「まあ普通だろうな」

エリ「普通っつーのは代わり映えしないってことさ。つまり変化がない。それが変化に疲れた海外の人にウケてるらしいぜ」

ピンとこない表情の愛。

ポテトチップスの袋を空手チョップで破裂させる。

エリ「なんかの儀式？」

○公園（夕）

ベンチに座ってぼーっと鳩やスズメを眺めているヒロシ。

○書店（夜）

興味なさそうに本棚を眺めながら店内をぶらつくヒロシ。腕時計を見る。

○駅前広場（夜）

ストリートミュージシャンを眺めているヒロシ。通行人が千円札をカンパシていくのが目に入る。

○荻上家・居間（夜）

夕食中の美沙と愛。

そこに着流し姿でチョンマゲのかつら
を被ったヒロシが帰ってくる。

ヒロシ「ただいま。あーお腹減った」

ヒロシを見る美沙と愛。気にせず手を洗って自分の席に座るヒロシ。

美沙「なにそれ」

ヒロシ「ええ？ ああ、今日仕事早く終わってたんだよ。あれ、ご飯ないの？」

ヒロシの卓には夕食は用意されてない。

愛「いや、いや、その格好さ」

ヒロシ「おお、涼しくていいかなと思って。

ははは。あれ、ご飯ないの？」

○同・外（朝）

「1 P H O T O 5 0 0 Y E N」の

手描き看板が門の前に置かれている。

着流し・チョンマゲ姿のヒロシが観光

客たちとにこやかに記念撮影をしながら、お金をとっている。

ヒロシ、家を背にポーズを取る団体

観光客にスマホカメラを向けて、

ヒロシ「はい、ハブアナイスデイ！」

団体観光客たち「ハブアナイスデイ！」

シャッターを切るヒロシ。

家の中からカーテンを少しだけ開けて、その光景を覗く美沙と愛。

○同・脱衣所（朝）

美沙がヒロシを引っ張ってきて乱暴にドアを閉める。

ヒロシ「なにになに、どうしたのそんな怒った顔して。暴力やめよ？　そういうのナシね？」

美沙「どうしたのじゃないっつもの！」

○同・脱衣所の前（夜）

愛が脱衣所のドアを眺めている。

中からは二人の話し声。

美沙の声「公園の鳩だってエサをあげないでくださいって書いてあるでしょ！　これじゃお墨付き与えてるようなもんじゃん！」

ヒロシの声「面白いことを考えるねえ！

でもそれは人権問題だよ、人を鳩扱い

したら」

美沙の声「鳩の扱いよりタチ悪いでしょうが
アンタのやってることは！」

愛、呆れた表情で玄関から外に出る。

愛「いってきまーす」

音から観光客たちと愛の声。

観光客たちの声「ハブアナイスデイ！」

愛の声「うっせ」

○同・脱衣所（朝）

美沙とヒロシが口論中。

美沙「だいたい会社はどうすんの」

ヒロシ「会社はほら、有給取ったから」

美沙「急に？ 今日？ 忙しいんじゃない

の？ えどうして？」

ヒロシ「ああ、だからさ、辞め……辞めても

っとその、違う道を模索してもいいかな

あ？ みたいなの

美沙「クビになった」

ヒロシ「いやいや」

美沙「クビになったんだ」

ヒロシ「はい」

呆れた表情の美沙。

ヒロシ「でも見ろって、ほら」

観光客から集めたお金の入った容器を
見せるヒロシ。

ヒロシ「一万五千円はある。たった30分で
だよ？ 一日やったらどうなる？ 毎日
やったら？」

無言でお金を眺める美沙。

ヒロシ「金が貯まったらこんな家売り払って
悠々自適タワーマンションにでも住めば
いいじゃない。アパート買って家賃収入
で不労所得生活だって夢じゃない。お前
だってスーパーの雇われ店長なんかずっ
とやってたくないだろ？」

美沙「私は今の仕事にも生活にも満足して
る」

ヒロシ「その満足を外のあいつらが妨げてる
んだよ？ だったら利用しない手はない

と思うけどな」

考え込む美沙。

○スーパーマーケット・売り場

平台のコーナーの飾り付けを眺めながら、心ここにあらずで考え込んでいる

美沙。

バイト「(来て) 店長すいません」

美沙「はい？」

バイト、背後の外国人客をチラと見て、
バイト「あの、あちらの方が英語で何か探してるみたいなんですけど」

美沙「(独り言) こんなところまで来たんじゃないだろうなあ……」

バイト「？」

グエンが品出し用の台車を押して通りかかる。

美沙「あ、グエンさん」

足を止めて美沙を見るグエン。

美沙「英会話って、できたよね」

グエン「はい」

美沙「あちらのお客様お願いしていい？」

グエン「はい」

外国人客の方に行って流暢な英語で

接客するグエン。

その光景を眺めている美沙。

○駅前（朝）

ツアー客のための旗を持って立っているグエン。

そこに、観光バスから降りてきた外国人観光客たちが向かってくる。

○住宅街（朝）

外国人観光客たちを引き連れて荻上家の方に向かうグエン。

歩きながら英語で解説をしている。

グエン「（英語）母親の美沙が父親のヒロシと出会ったのは大学生の頃でした。二人はともに経済学部 に在籍 していて、サーク

ルも同じテニス・サークル。といってもサークルの活動は飲み会にあけくれることでした」

観光客たち、笑う。

○荻上家・玄関（朝）

グエンが観光客たちを先導して家に入ってくる。

グエン「（英語）靴は脱いでください。日本では玄関で靴を脱ぎます。写真は後ほど撮影時間を設けますから焦らないで」

指示に従う観光客たち。

○同・居間（朝）

着流し姿のヒロシとエプロン姿の美沙が朝食を食べている。

グエンが部屋に入ってきて、

グエン「（英語）こちらが日本の普通の食卓です」

観光客たちからワーオなどの感嘆の声。

二人の朝食を興味深げに眺める観光客たちなどまるで視界に入っていないかのように、ヒロシは新聞を眺め、美沙はテレビのワイドショーを見続ける。ヒロシ、空になった茶碗を、席から動かず美沙に差し出す。

ヒロシ「おかわり」

ハア？ という表情でヒロシに視線をやる美沙。

いいから合わせろ、とアイコンタクトで美沙に伝えるヒロシ。

美沙がチラと観光客たちに目をやると、茶碗の行方を固唾を吞んで眺めているのが見える

美沙、仏頂面で茶碗を受け取り、台所の炊飯器に向かう。

グエン「（英語）こちらが日本の普通の夫婦です」

観光客たち、ヒュー！ とか言いながら笑顔で拍手する。

○同・庭（朝）

中に入りきららない観光客たちが庭から居間を眺め、盛り上がっている。

○同・愛の部屋

カーテンの隙間から外を眺めている
普段着の愛。

その窓からは玄関前でヒロシと美沙が
観光客たちと記念撮影を行っているの
が見える。

○同・階段下

階上から愛と美沙の口論が聞こえる。
グエンは階段下に立って不安げに階上
を眺めている。

愛の声「お父さんはいいよ！？ そんなの元
から信頼してないから。でもお母さん
までなんなわけ！？ え、どういうこと
なの！？」

美沙の声「あんたはこれから大学受験だつてあるじゃないの。お金がかかるの、好きなように通りに生きるには」

愛の声「じゃ好きなように生きるわ！」

美沙の声「ねえ、ちよつとなに。愛。ねえ！愛！」

愛、スクールバッグを持って階段をドタドタと降りてくる。

グエンが目に入って、

愛「お前は誰なんだよ！」

グエン「グエンです」

愛、グエンを無視して外に出て行く。入れ替わりに観光客たちを連れたヒロシが家に入ってくる。

ヒロシ「はいどうぞこちらです。靴は脱いで下さいねえ。汚いからねえ」

○同・外観（夜）

観光客はもういなくなっている。

○同・居間（夜）

豪華な宅配寿司を中心に、とても食べきれないほどのデリバリー料理をテーブルに広げて食べているヒロシと美沙、
グエン。

美沙の顔は浮かない。グエンは遠慮がちにカップ巻きなどを食べている。

ヒロシ「連絡つかないわけじゃないんだろ」

美沙「うん。向こうの親御さんとも話した」

ヒロシ「じゃあいいじゃない。どっか変なところ行ってるわけじゃないんだから」

ヒロシ、ウニ軍艦を口に入れて、

ヒロシ「うわ、これ食べてみ。本物の寿司は違うなあ。グエンさんもどうぞどうぞ、遠慮しないで。これが日本のへお・も・て・な・し〜だから」

グエン「あ、はい」

ヒロシ、ヘラヘラ笑いながら缶ビールを開けて飲む。

ヒロシ「くうう！」

○エリの家・エリの部屋（夜）

イチゴミルクを飲みながらアニメを
見ているエリの傍らで、パジャマ姿の
愛が野球盤をやっている。

エリ「そのうち飽きるっしょ。ブームなんて
そんなもんだからなー」

愛「はあ？ 賛成派？」

エリ「金は搾り取れる所から取っておけだ。

次はウチが流行んないかなー」

愛「甘いな。当事者は語る」

エリ、野球盤を見て、

エリ「それ、超つまなくて笑えない？」

愛「めっちゃ笑える」

○スーパーマーケット・店長室

美沙が他店の店長やエリア統括とオン
ライン会議中。

他店店長「そうですねえ、ウチも季節物中心
に盛り上げていく形になりますかねえ」

エリア統括「わかりました。まあもうちよつとね、自店の、地域とかね、そこだけの強みを生かした施策を企画できるように、はい」

他店店長「すみません」

エリア統括「荻上店長、どうですか」

美沙「そうですねえ。まあウチはやはり高齢者のお客様が全体の三割超えていますので、

お届けサービスの周知——」

エリア統括「え、なんかさ、荻上店長ネットでバズってますよね？ これ違ったら

ごめんなさい」

美沙「……はい」

エリア統括「それ生かして、観光客のお客様引っ張ってこれたりしません？」

美沙「……いやあ」

美沙、苦笑いを浮かべる。

○高校・教室

授業中。

愛の斜め後ろの席の男子が、教師が背を向けた隙にスマホを取りだして、愛をカメラで撮る。

教師「おい今誰だ写メ撮ったの。次やったら生活指導室な」

板書を再開する教師。

愛、振り向かず、写真を撮った男子生徒に中指を立てる。

○荻上家・寝室

ヒロシが自分が出演する YouTube 用の動画を撮影している。

手元には様々な銘柄の缶ビール。

ヒロシ「ハローエブリワン！ ようこそ、

ジャパニーズ・ダッド・チャンネル！

えー、というわけでね、今回はこれ！

日本の缶ビールの飲み比べ！ ジャパニ

ーズ・カン・サケ！ オーケーイ？」

○同・外

観光客たちで賑わっているところに車
がやってきて、道を空けるようクラク
ションを鳴らす。

○駅前（夕）

観光バスに乗った観光客を笑顔で見送
っているグエン。

バスが走り去って、ふと振り返ると、
背後に制服姿の愛が立っている。

驚いて尻餅をつくグエン。

グエン「びっくりした」

○ファミレス（夜）

グエンにメモ紙を渡す愛。

テーブルの上には二人分のジュース。

グエン「なんですか」

愛「これ、取ってきてくれませんか」

グエン「え」

愛、イライラした表情を浮かべる。

愛「家帰りたくないから私の部屋からそれ

取ってきてくれないですかって言ってるんですけど」

グエン「あー」

愛「ん、言ってることわかりますよね？」

グエン「ああ、はい。え、なんで私が」

愛「だから家帰りたくないんだってば」

グエン、苦笑する。

グエン「私、召使いじゃないよ？」

愛「それはすいませんだけど」

グエン「家、帰ればいいじゃん」

愛「はあ？　なんでタメ口なの？」

グエン「だってあなたからお金もらってない

からね」

愛「えげつな」

○荻上家・外（夜）

10人ほどの外国人観光客がまだ残ってガヤガヤしている。

向かいの家から島津（68）が出てきて、大きな声で独り言のように

島津「うるせえなあ」

と言いなながら荻上家の門に向かう。

庭でレプリカの落ち葉を竹箒で掃いているエプロン姿の美沙を見つけて、

島津「ねえちよつと！ 奥さん！」

美沙「はい？」

島津「おいどうにかしてくれよこれ。うるさくてしょうがねえよ！」

美沙「すいません……」

島津「ずっとこうじゃねえかよ」

美沙「あの、私たちが呼んだわけではなくて
ですね——」

島津「警察呼ぶからな！ ちゃんとしろ

バカ！」

家に戻っていく島津の後ろ姿を、美沙は呆然と眺める。

○ゲームセンター（夜）

愛とグエンとエリが音楽ゲームなどで遊んでいる。すっかり打ち解けた様子。

○荻上家・居間（夜）

ヒロシが一人でソファーに横になって
笑いながらテレビを見ている。

ヒロシ「おかーさん。ご飯はー？」

美沙の返事はない。

○荻上家の前の道路（夜）

観光客も帰った深夜の道路には、ペツ
トボトルや破れたチラシなどのゴミが
散乱している。

○駅前（朝）

観光バスが停車して、中から外国人
観光客たちが降りてくる。
寝ぼけ眼をこすり、のびをしたりする
観光客たち。

○荻上家・寝室（朝）

ヒロシ、姿見を見ながら慣れない手つ

きで武士の鎧を装着している。

○同・居間（朝）

台所で美沙が味噌汁を作っている。

ヒロシが壁にゴツンゴツンと鎧をぶつけながら一階に降りてきて、居間に入ってくる。

よろよろと歩いてソファーに倒れ込む。

ヒロシ「おはよう！ いやあ、大変だこれ」

美沙「なにやってんの？」

ヒロシ「ほら、最近ツアー客が減って

きただろ。やっぱりほら、こっちもさ、

企業努力をしないと。あ、立てなくなっ

ちやった！ ちよ、ちよっと助けて」

○住宅街（朝）

観光客たちが荻上家へと向かう。

すると、荻上家の前に数人の外国人

女性がプラカードを持って立っている

のが見える。そのプラカードには

「Cultural Exploitation is HUMAN

RIGHTS VIOLATIONS!」(文化の搾取

は人権侵害!)」の文字が見える。

○荻上家・居間(朝)

ソファ―に転がる鎧姿のヒロシを立たせようとしている美沙。

すると外から活動家の外国人女性たちのシュプレヒコールが聞こえる。

活動家たちの声「(英語)文化の搾取を今すぐやめろ!」

声に驚いて外の方に目をやるヒロシと美沙。

○同・外(朝)

美沙と鎧を着たままのヒロシが外に出てくると、活動家たちが手を繋いで、観光客たちが近づけないよう、荻上家の前の道路を塞いでいる。

観光客たちはその様子をスマホで撮っ

たり、笑ったり、活動家に道を空けるよう食ってかかったりしている。

向かいの家の窓から島津が顔を出す。

島津「うるせー！」

だが観光客も活動家も気にしない。

活動家たち「（英語）日本人の私生活は見世

物じゃない！」

美沙とヒロシ、その光景を困惑の表情で眺める。

ヒロシ「おいおいおいなんだよこれ」

美沙「人権侵害だつて」

ヒロシ「ええ？」

美沙「たぶん、人権侵害だつて言ってる」

ヒロシ「人権侵害って……これじゃ商売の

侵害じゃない。困るんだよなあ、ああい

うの」

いつの間にか家の前に来ていた愛と

グエンが、活動家に英語で話をつけて、

人間の鎖を通してもらう。

二人に気付く美沙とヒロシ。

美沙「あ、おかえり……」

ヒロシ「え、なんで一緒にいんの」

グエン「おはようございます」

美沙「おはよう……」

美沙の横に立って、活動家と観光客を
眺めるグエン。

ヒロシ「ちよっと、ねえ、愛」

愛は無言で家の中に入っていく。

ヒロシ、それを追う。

○同・居間（朝）

愛が入ってきて冷蔵庫から豆乳を取っ
て飲む。

ヒロシはその後ろにくっついてきて、

ヒロシ「なあおいって。おい。どうした？

な、なんでグエンさんと一緒にいたの」

愛「うるっさいな。なんだっていいじゃん」

ヒロシ「よくないよ。お父さん友達の家泊

まるっていうから許可したんだよ？」

愛「友達の家泊まった」

部屋を出て自分の部屋に向かおうと
する愛。

ヒロシ「え、じゃあなんでグエンいるの」

愛「え、いたらなんなの？」

ヒロシ「いや、そういうのはさ」

愛「好きにさせてよ。そっちも好きにやって
るじゃん。んなバカみたいな格好して」

ヒロシ「好きってさ……技能実習生だよ？
知ってるの？」

愛、足を止めてヒロシを見る。

愛「ハア!？」

ヒロシ「技能実習生」

愛「聞こえてるけどそれがなんだよ!」

ヒロシ「普通の子と付き合ったら？」

愛「付き合っていないしちよっと待ってなんな
んだよ、普通の子？ 技能実習生は普通

じゃないわけ？」

ヒロシ「そういうことじゃなくてさ」

愛「あのさ、言っとくけどグエンお父さんよ
り全然頭良いよ。ベトナム語と日本語と

英語の三カ国語話せるからね。できない
でしょお父さん」

へらへら笑うヒロシ。

愛「面白くねえんだよ！」

ヒロシを突き飛ばす愛。

ヒロシ「あ痛あ！」

倒れて起き上がれないヒロシ。

外に駆け出す愛。

○同・外（朝）

パトカーがやってきて、中から警官4
と5が降りてくると、活動家に近づい
ていく。

警官4「通行妨害だから。通行妨害やめてく
ださい」

カづくで活動家たちをその場からどか
そうとする警官二人。

愛、その状況を尻目にグエンの手を
取って、

愛「もう行こう！」

美沙「アンタどうしたの？」

愛は呆気にとられたままのグエンを引っ張ってその場を去って行く。

美沙「ねえ、ちよつと。どこ行くの？」

愛は美沙の声に振り返らない。

それから美沙は警官隊に抵抗する

活動家たちに目を向ける。

美沙、警官に駆け寄って、その手を放させようとする。

美沙「ちよつとやめてくださいよ！ やめてください！」

他の活動家たちは座り込んでシュプレヒコールを叫び続けている。

警官への抵抗が無駄だとわかると、

美沙はその場に座り込んでシュプレヒコールを叫び始める。

そこに水の入ったバケツを持って島津がやってきて、観光客たちに水をかける。

島津「ゴーホーム！ ゴーホーム！」

観光客たちと島津のつかみ合いの喧嘩が始まる。

観光客たちには近所の野次馬たちも混ざって、あたりは大混乱。

警官4が慌てて応援要請を出す。

○荻上家・居間（朝）

鎧姿で倒れたままのヒロシ。

ヒロシ「おーい、ちょっと、誰か助けてくれー」

何者かが外から石を投げて、居間のガラス戸が割れる。

ヒロシ「うお！ なに！ え、なに！」

（F・O）

○荻上家・外観（朝）

観光客が一人もおらず、通りかかる人もない、静かな風景。

○同・居間（朝）

テレビのニュースで新型コロナのパン

デミックにより日本も外国人の新規入国を停止したとの話題をやっている。台所ではエプロン姿のヒロシが味噌汁の味見をしている。

ヒロシ「悪くないね」

ヒロシ、鍋の火を止めて味噌汁を椀によそうと、白米やパック納豆などの置かれたトレーに置く。

朝食の載ったトレーをテーブルまで運んで、

ヒロシ「いただきます」

テレビを見ながら一人で朝食を食べ始める。

居間のガラス戸は割れた箇所が養生テープと板で補修してある。

○スーパーマーケット・バックヤード（朝）

美沙と店員たちの朝礼の最中。

美沙「えー後は……今日も他に連絡事項はないかな。はい、じゃあ、中村さん、

お願いします」

パート中村「いらっしやいませ」

全員「いらっしやいませ」

パート中村「ありがとうございます」

全員「ありがとうございました」

○荻上家・廊下

ヒロシが鼻歌を歌いながら掃除機をかけている。

○高校・屋上

愛とエリが菓子パン類の昼食を食べている。

エリ、その手を止めて、

エリ「はいここでなぞなぞです。犬は犬でもカワイイ犬はなんでしよう」

愛「カワイイ犬？ カワイイ犬……全部だわ。犬全部カワイいわ」

エリ「正解。では、猫は猫でもカワイイ猫はなんでしょーか」

愛「カワイイ猫……それも全部だわ」

エリ「正解。でーは、ここからが本番です。

ペットはペットでもカワイイペットはなん
でしょう！」

愛「全部だわ！ それも全部だわ！

ええ！？ あるそんなこと！？」

食事を再開する二人。

エリ「この茶番飽きたな」

愛、ポテトチップスの袋を普通に開け
る。

エリ「割らねえんだ」

○コンビニ・売り場

ヒロシが入ってきて、店の事務所へと
向かう。

ヒロシ「おはようございます」

バイト店員「おはようございます」

発注端末を首から提げたバイト店員は
技能実習生。

○スーパーマーケット・事務所（夜）

美沙、店長室から出てきて、社員たちに声をかける。

美沙「じゃあ、後はお願いします」

社員たち「お疲れ様です」

美沙「お疲れ様です」

外へ出て行く美沙。

○ゲームセンター（夜）

愛とエリがガンシューティングゲームをやっている。

愛、ボス敵にやられる。

愛「こいつ鬼門だわ」

愛は下がって、後ろで見ていたグエンにコントローラーを渡す。

グエン、画面にコントローラーの狙いを定める。

が、コンティニューのための硬貨が投入されていないので、グエンのゲームは始まらない。

愛「コインコイン」

グエン「ああ」

愛に手を差し出すグエン。

愛「いや自分で払えや」

グエン「ニホンジンカネニキタナイネー」

愛「都合悪いときだけ片言なるなや」

○マンション・廊下（夜）

エコバッグを肩にかけて美沙が廊下を歩いてくる。

○同・美沙の部屋（夜）

愛、玄関から入ってきて、部屋の電気をつける。

美沙「ただーいま」

平凡なマンションの、飾り気のない室内が現れる。

美沙、しばらくその部屋を立って眺めている。

○コンビニ・ウォークイン（夜）

ヒロシがドリンクの補充をしている。

と、呼び出し音が鳴る。

小走りにレジに向かうヒロシ。

ヒロシ「はい、はい」

○同・売り場（夜）

ウォークインからヒロシが出てくると、若者三人組が楽しげに話しながらレジの順番を待っている。

レジに入ったヒロシが、

ヒロシ「お待ちのお客様どうぞ」

と呼びかけると、三人組は愛・エリ・グエンであることがわかる。

少し驚いた表情を浮かべるヒロシ。

ムスツとした表情を浮かべる愛。

気まずそうな表情を浮かべるグエン。

とくに気にした様子のないエリ。

エリ「あ、こんちわっす」

レジにやってくる三人。

グエンがカゴを置いて、ヒロシがその中身をスキャンしようとする、お菓子や酒が入っている。

ヒロシ「まだ未成年だろ」

グエン「あ、私が買うので」

愛「飲まねえよ」

ヒロシ「……画面にタッチをお願いします」

グエン、タッチパネルの年齢確認ボタンにタッチすると、愛に三千円渡す。

グエン「タバコ吸ってくるから払っというて」

愛「はあ？」

グエン「アリガトゴザマース」

エリ「おじさん、じゃまた今度」

ヒロシ「ああ、はい」

店を出て行くグエンとエリ。

ヒロシ、商品をスキャンしながら、

ヒロシ「学校はちゃんと行ってるの」

愛「行ってる」

ヒロシ「お母さん元気」

愛「そうじゃない」

ヒロシ「もう全然観光客、来なくなっちゃったよ。コロナで」

愛「ふうん」

ヒロシ「袋は？ いる？」

愛「つけてください」

ヒロシ「3236円です」

愛「足りねえじゃねえかよ」

愛が財布を取り出そうとすると、

ヒロシ「あ、いい、いい。お父さんのお」
「り」

愛「いやダメでしょそういうの。店員として」

ヒロシ「いいって。はい、三千円ちょうどいただきます」

商品をレジ袋に詰めるヒロシ。

ヒロシ「なあたまにはさ、お母さんと一緒に帰ってきな。もう観光客いないから。」

みんなの家だからさ」

愛、少し考えて、

愛「気が向いたらね」

ヒロシ、愛にレジ袋を渡す。

ヒロシ「はい」

愛はそれを受け取ると店を出て行くようにする。

ヒロシはそれ呼び止めて、

ヒロシ「愛」

愛「（振り返り）んー？」

ヒロシ「ハブアナイスデイ」

愛、呆れたように吹き出す。

愛「ハブアナイスデイ」

それから、愛は外に出ていく。

（了）